

AA 研共同利用・共同研究課題

「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

平成 23 年度第 1 回研究会

日時: 平成 23 年 6 月 4 日(土) 午後 1 時～午後 7 時

場所: 東京外国語大学本郷サテライト 7F

■研究会プログラム

【趣旨説明】 津田浩司 (AA 研所員)

【報告 1】 櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 京都大学 GCOE 研究員)

「社会現象としての「対象」をいかにして捉えるか: 行為中心のアプローチの可能性」

【報告 2】 津田浩司 (AA 研所員)

「インドネシアの国家英雄ジョン・リー: 喚起される「華人」像」

平成 23 年度から 3 年間の予定でスタートした AA 研共同利用・共同研究課題「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」の通算第 1 回目の研究会開催にあたり、まず代表者の津田より趣旨説明がなされた。

現代社会における「華人」にまつわるコミュニカルな記憶形成と社会の再構築を考察するにあたり、「華人であること」の意味内容が地域や時代、あるいは状況ごとに多様である事実を踏まえ、本研究会では「華人」(という意識を持っている人々)をア priori に想定するのではなく、行為中心のアプローチによって、いつどのような事象においてどのような人々がいかなる「華人」として立ち現れるのかを明らかにすることに主眼を置くことが確認された。とりわけ、人々がどのような「記憶」を(再)生産し、またそれによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ実現しようとしているのかに注目し、その結果として立ち現われる「華人」なるものの多元的様相を明らかにすることで、硬直的な「華人」像を問い直すことが、最終的な目標であることも示された(⇒「趣旨説明」の要旨を参照)。

津田の趣旨説明を受けて、櫻田より問題提起がなされた。櫻田は、社会現象としての「華人」をいかに捉えるべきか、先行研究の問題点を整理した上で、解釈論に陥ることなく対象に接近する方法論上の可能性として、行為中心のアプローチを明快に解説した上で、その有効性と限界について指摘した(⇒「報告 1」の要旨を参照)。

これら「趣旨説明」および「報告 1」を踏まえ、概念整理と問題点の洗い出しの議論が活発になされた。特に、行為中心のアプローチによって描き出された「華人」という社会現象の記述(「実践誌」)を、単に「華人の多様性」を示す複数のヴァージョンの羅列として留め置くのか、それともそれらは何らかの形でまとめ得るものなのか、あるいは、本質主義的な見方を打破すべく打ち立てられた「複数のヴァージョン」の提示が、意図せずして「依然として華人である」とされてしまうような語りや認識論の問題にいかに対処すべきか、などといった核心的な課題に、参加者からの議論が集中した。

後半のプログラムでは、津田が上述の「趣旨説明」および「問題提起」に沿う形で、2009年にインドネシアの国家英雄に認定された人物をめぐって喚起される「華人」像についての事例報告がなされた(⇒「報告 2」の要旨を参照)。報告後のディスカッションでは、多様なアクターが関わりひとつの運動に乗せられていくことで、ひとりの人物の上に様々なイメージや価値が付与されていくことに面白さを感じる一方、中心的に関わったアクターそれぞれの意図や動機についてさらなる調査が必要である点が指摘された。また、各アクターが掲げている理念の裏に潜むような名声欲やエリート・コミュニティ内のマイクロな政治の問題、あるいは近年の中国政府の文化政策との対応関係の有無などについても、鋭い質問が寄せられた。その他にも、「新たな華人像」を提示しようとしつつもその手法がスハルト時代の古い制度に拠りがちなのはなぜか、華人の位置づけ直しが他のインドネシア現代史の中の様々な「和解」とどのような関係にあるのか、などの点をめぐって白熱した議論がなされた。

(文責: 津田)

■「趣旨説明」の要旨

報告者: 津田浩司(AA 研)

本共同研究会は、今日主に東・東南アジアの各地で、ある一群の人々がどのように「華人であること」を生き、またどのような広がりでもって彼らなりの「華人世界」を思い描き、新たな関係性を構築しようとしているかを、多角的に明らかにすることを目的としている。

言うまでもなく「華人であること」は、それぞれの地で歴史性を帯びた文脈依存的なものであり、また近年その「華人」たちを取り巻く環境も、東南アジアをはじめとする各国での政治状況の変化、国際地政学上の中国のプレゼンスの高まり、あるいはグローバル化のさらなる進展などを受け、大きく変わりつつある。本研究ではこうした事態を踏まえ、様々な出自や背景、文化要素を身に帯びた人々が、現在どのようなことを背景に、どのような「記憶」を(再)生産し、またそれによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ現実に立ち上げようとしているか、そしてそれが当事者もしくは外部者によってどのような意味で「華人」であると認識されるのか、その過程を具体的事例に即しつつ多元的に明らかにする。こ

の作業を通じ、何らかの社会事象を学術的に「華人」と一元的に表象することの意義と限界を検討する。

華人(華僑)研究においては近年、社会科学全般における本質主義批判の流れを受け、個々の研究者がそれぞれの問題意識に沿って「華人であること」の多様性を明らかにしようとする試みが見られるようになった。移住先社会への「土着化」や「再華人化」のあり方を問うような議論も、そうした研究上のひとつに位置付けられるが、しかしともすれば、当事者のアイデンティティの問題へと矮小化されたり、あるいは同化すべき対象文化／本来のオリジナルな文化といった二分法的枠組みを暗黙裡に想定しがちであった。

本共同研究会では、現実的つながりを実現すべく構築されるものとしての「記憶」、そしてそれを基に確立される「想像」の広がり注意到注意を払いつつ、人々が様々な行為実践を繰り広げる中で立ち上がるそれら多様な想像および現実としての「華人の広がり」を、個々の文脈に即して跡付けようとするものである。人類学・歴史学・地域研究等の立場から「華人研究」に取り組んできた若手研究者をメンバーに招き、最新かつ背景の異なる様々なフィールドの事例を基に検討を重ねることで、「華人であること」の意味を多面的・動的に明らかにできると考える。

また、従来「華人」にまつわる広がりについての議論は、「華人ネットワーク論」に代表されるように、経済的な関係性やつながりが殊更重視されてきたが、本共同研究会では、移住／再移住／越境婚姻に伴う人々の歴史空間認識、宗教実践に伴う連携の展開、ポップカルチャーを含む文化の流通・共有、あるいは個々の国民国家の文脈での「華人」の地位向上、大陸／台湾等の「中心」から発せられる政治・経済・文化的な囲い込みなど、今日各地で社会的に想像ないし実現されている様々な広がりや在り様を、具体的かつ多角的に明らかにする。人々がいかなる意味で「華人を生きている」のかを、文脈やプロセスの中で諸相ごとに理解していくことを通じ、ややもすれば「華人世界」と一元的に表象されかねない現実を解きほぐし、硬直した「華人」概念そのものを問い直してゆく。こうした学問的姿勢は、「華人(華僑)研究」が抱える根本的な限界性を浮き彫りにすると共に、今後の展開の模索に大いに寄与するものと期待される。また同様の問題構成は、「華人」のみならずその他のいわゆる対象に規定された学問全般とも共有できるであろう。

(文責: 津田)

■「報告 1」の要旨

「社会現象としての「対象」をいかにして捉えるか: 行為中心のアプローチの可能性」

櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 京都大学 GCOE 研究員)

それぞれが異なるフィールドとテーマを持つ共同研究員が研究課題「多面的想像・動的現実としての「華人」をめぐる研究」を実施するに際しどのようなアプローチをとるべ

きなのだろうか。本報告は「華人」という社会現象の共同研究を開始するにあたり必要となる共通認識を確認した上で、援用すべき方法論として行為中心的アプローチを提示し、その可能性について議論することを目的とするものであった。

報告では、まず華人研究において常に議論となる対象をどのように措定するかという呼称をめぐる問題を確認した。

「中国にルーツを持つ人びと」をどのような呼称で同定するかは、研究者の数だけ呼称が存在するといっても過言ではないほど多様である。多くの華僑華人研究に携わる研究者が「華僑」、「華人」、「華裔」、「華商」、「中国系」、「華人系」など様々な呼称を用い、試行錯誤しながら対象とする人びとの実体を明らかにしようと試みてきた。しかしこのような努力の上に慎重に「華僑華人研究」を設定しているにもかかわらず、あるカテゴリーで対象を定立する（例えば「華」という概念によりつながる人びとと対象をイメージする）ことは、彼らのうちに何か核となるものがあるという本質性を無自覚にも前提とする視点になりかねない危うさを持つ。

また、本質的実体を持つものとして華人を理解する立場を退けようと、様々なレベルの個別の日常生活を「華人世界」などの幅を持たせた言葉で表現することは、結局のところ多様な世界に網をかけ一元化してしまう視点に等しいし、その一方で「多様な」、「多元的な」という形容詞を伴い慎重に議論を試みたところで、本質性を持った実体の集合として対象を想定することに帰着してしまう。このようにして、華僑華人研究者は華人という存在の本質的解釈を意図しないにもかかわらず本質的解釈の呪縛からは逃れられないというジレンマを長らく抱えてきたといえるだろう。それでは「華人」と称される社会現象をいかに捉えるべきなのだろうか。

本報告では、「華人」と称される人びとに特有の文化内容や文化的インデックスを取り出し、それらを解釈する立場をとるべきではないことを示した。文化内容を通して華人アイデンティティの分析を試みる立場は対象の内的感情行為の解釈に他ならず、それは彼らの主観と我々の主観がどこまで行っても平行線をたどる人類学的行き止まりであることを指摘した。つまり、本共同研究で採るべき立場は解釈的分析ではなく社会関係を明らかにする視点、つまり社会人類学者アルフレッド・ジェルが主張する「行為中心的アプローチ (action-centered approach)」により社会関係の分析を中心にすべきであることを示した。ここで重要となる視点は、「どのように真実を見つけるか (“how to find the truth?”)」ではなく、「どのように対象が実践のうちに扱われるのか (“how are objects handled in practice?”)」という問いの立て方である [Mol 2002: 5]。

事実を開かれたソーシャルプロセスとして捉える視点、つまり対象を、意味を持った静的コードとして解釈するのではなく行為体とみなしその社会関係のプロセスを展開しようとする態度は、本共同研究の議論を貫くアプローチの一つとして有用である。

このようにして、本報告では本共同研究で実施する個別の研究テーマを民族誌ならぬ実践誌 (praxiography) と位置付けることにより、「華人」という対象は解釈されることを待

つ静的な対象としてではなく、開かれた社会現象として描くことができると同時に、解釈的なエスニシティ研究の系譜上に華人研究を据えることなく議論を展開することが可能となることを指摘した。

その一方で残される問題も少なくない。それぞれのフィールドの事例から紡がれる「実践誌」が集まった後、個別の実践から立ち上がる「華人」という複雑性をどのように扱うか（結びつけるのか、あるいはバラバラなものとしてみなすのか）という問題は本報告では明らかにはならなかった。行為中心的アプローチは、認識論に依拠することなく対象に接近し本質主義的議論を退けることを可能とする。しかし、それぞれのフィールドから立ち現れる「華人」という社会現象の集積を最終的にどのように議論するかについての道筋までは示すことが出来なかった。この足りない部分をどのように議論していくのかというのが次の課題になるだろう。

Gell, A. (1998), *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford: Oxford University Press.

Mol, A. (2002), *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*, Durham: Duke University Press.

(文責: 櫻田)

■「報告 2」の要旨

「インドネシアの国家英雄ジョン・リー：喚起される「華人」像」

津田浩司 (AA 研所員)

本報告は、ジョン・リー(John Lie; 1911-1988年)という北スラウェシ州マナド市出身の人物が、インドネシアの国家英雄に認定されたという事実について、それが一体どういう事態なのか、またその認定を通してどのような「華人」の姿が浮かび上がったのかについて分析した。報告者はすでに別の所で、2003~04年に手掛けられ最終的には失敗に終わったひとつの「華人国家英雄」推戴運動の顛末を分析しているが[津田 2007]、本報告は、2009年末に最終的に成功に至ったもうひとつのヴァージョンである。

インドネシアでは1998年にスハルト体制が崩壊して以降、それまで抑圧されてきた華人が積極的に「華人」としての主張をしていく動きが活発化してきている。そうした中で、いかに華人を「インドネシア国民=民族(Bangsa Indonesia)」の中に位置づけるかをめぐっては、①スク(suku; 「インドネシア国民=民族」を構成するサブ・グループ、エスニック・グループ)としての華人、②独自のアイデンティティを保ちつつマジョリティ社会と共生・協働する華人、という2つの姿を同時的に打ち立てアピールしていくことが、華人知識人たちの

間でひとつの大きな潮流となっている。また、このいわゆる「新たな華人像」は、社会的・政治的に広く許容されるようになっている。

初代大統領スカルノの時代に確立された「国家英雄(Pahlawan Nasional)」の制度を利用することで、インドネシアのネーション・ビルディングの過程に華人の役割をしっかりと位置づけようとする動きも、上述の一連の大きな動きのひとつと見なし得る。その「華人国家英雄」推戴運動は、スハルト体制崩壊後に相次いで誕生した複数の華人団体が、互いにほとんど連携することなく手掛け始められたものであり、その過程で、インドネシアに貢献したと見なし得る複数の華人が候補に挙げられた。最終的に 2009 年にノミネートされ国家英雄にまで漕ぎつけたジョン・リーは、中でも比較的早い段階から有望な候補として取り沙汰されていた人物であるが、2008 年末には国家英雄認定のための要件を満たすべく、SAKTI 研究所および NABIL 財団という 2 つの華人系の団体が、相次いでこのジョン・リーに関する伝記を出版する。このうち、内容面で「客観的な生涯の伝記」という条件をクリアしたのは、著名な歴史家の支援を受けた NABIL 財団版であり、結果的に同団体がジョン・リーを国家英雄にするための手続きを主導していくことになる。

本報告では、この運動を主導した NABIL 財団の主催者、ならびに、「スハルト時代に歪められてしまったインドネシアの見直し」を叫び「華人国家英雄」運動の論陣を展開した歴史家について、その意図や背景を紹介した上で、彼らが後押しをすることで世に出たジョン・リーの伝記の内容を分析した。

当該伝記の中心となっていたのは、言うまでもなくジョン・リーの英雄物語であり、とりわけ、独立戦争時にオランダの海上封鎖を幾度となく掻い潜り、マラッカ海峡を横断して共和国軍側に武器や医薬品を提供したというエピソードが、主要な部分を占めている。また、その後の海軍内での愛国的活躍や、退役後の信仰心溢れる教会活動、献身的な社会貢献活動なども、評価すべき要素として付随的に記述されている。このように、伝記からはいわば模範的な「インドネシア人」としてのジョン・リーの姿が浮かび上がってくる一方で、彼の「華人」としての要素はおよそ前面には出されていない。のみならず、彼自身が生涯を通じて、己を華人とは見なさずに生きたことが強調されてもいるのである。つまり、伝記から直接的に浮かび上がるジョン・リーの姿というのは、今やネガティブな評価が下されるようになったスハルト体制下の「同化政策」が、理想的な姿として提示してきた華人像にむしろ近いとすら言えるのである。

ただし注意すべきなのは、ジョン・リーが喚起する姿というのは、一方では従来の国家英雄像にきれいに収まりきるものであったという事実である。言い換えれば、彼の為したことは、軍・宗教・自治体にまつわる既成の価値体系を何ら侵食することなく、またインドネシア史の大幅な見直しを迫るものではなかったのである。それゆえか、彼は 2009 年に国家英雄にノミネートされるや、ほとんど何も争点となることなくスムーズに認定にまで漕ぎつけるのである。

しかしながら面白いことに、その後ジョン・リーは、当人の実際の生き様やアイデンティ

ティに反する形で、殊更「華人の出自」が強調され、また、彼が為したことから直接的に喚起されるイメージを大きく超え出て、①華人に対する抑圧の時代からの解放のシンボル、②インドネシア国家の一員として生きていくスクとしての華人の姿、などの価値が付与され、紛れもない「華人国家英雄」として語られてゆくことになる。これらの価値は、他でもない「華人国家英雄」推戴運動がそもそも実現させるべく目指していた価値であり、したがってこの運動のプロセスに乗せられた時点で、およそ誰であろうともそうした価値をまともされる運命だったのかもしれない。ただ、ジョン・リーが直接的に喚起するイメージというのは、「華人国家英雄」推戴運動が目指した理想的価値とは幾分ズレを含み持つものであったがゆえに、かえって当該運動が提示しようとした「新たな華人像」が浮かび上がったのだと言えよう。

いずれにしても、ジョン・リーがインドネシアの国家英雄に認定されたことで、過去・現在・未来にわたってインドネシアの地に生き、インドネシアの地で暮らす全ての華人——それは北スラウェシ州の華人に限定されるわけでもなければ、東南アジアや全世界の華人にまで拡張されるものでもない——が、理念的にはジョン・リーに代表される形で、「インドネシア国民＝民族」の中に自らをしっかりと位置づける象徴的論拠を有することになったのである。

以上本報告は、本共同研究会の趣旨に沿うように、一連の出来事を通じてどのような「華人」の姿がどのようなプロセスを経て打ち立てられ、またどのような「記憶」が掘り起こされ、それがどのような範囲で「想像」されたのかといったことを、特に現代インドネシアの国家的枠組みとの関係性に注目して、文脈や背景を明らかにすることに努めた。

津田浩司. 2007. 「華人国家英雄」の誕生？—ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人性をめぐるダイナミズム」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』(73): 27-71.

(文責: 津田)